

伊藤  
優

「父を還す」

登場人物

高橋香 (32) (20)

誠の娘

高橋麗 (17) (5)

香の異母妹

高橋誠 (67) (55)

香と麗の父

高橋聡子 (42) (30)

誠の再婚相手

警察官

○香の家・香の部屋（昼）

お坊さん、経を唱えている。

喪服を着た高橋香（32）、手を合わせている。

経を唱えるお坊さんの前には冷蔵庫が横たわっている。

香 M 「今週は、冷蔵庫が死んだ。父が死ぬのを想像したことは何百回とある。でも、家じゅうの家電が一気に死んでしまうなんて想像もしなかった」

○同・玄関（昼）

香、お坊さんに頭を下げ

香 「どうもありがとうございます」

玄関ドアが閉まる。

香、抜け殻のように部屋の中へ。

○同・香の部屋（昼）

壁にもたれ、うなだれる香。

部屋には壊れた家電たちが転がって

る。

玄関ドアが開く音と同時にドタドタと  
両手に手提げ袋を提げた高橋麗（17）  
が部屋に入ってくる。

麗「ちよつと、おねえ、またゴミの葬式して  
んの？」

香「やめてよ」

麗「さつき、お坊さんと廊下ですれ違ったけ  
ど」

香「さつき終わったから」

麗「今日は冷蔵庫ね。家電ってやっぱり一  
気に壊れるもんね。今週、お坊さん何回呼ん  
だ？ お坊さん、めっちゃ顔疲れてたけど」

麗、机の上に食べ物が入ったタッパ―  
などを出し、広げ始める。

香「前も疲れた顔してたよ」

麗「誰も家電にお経あげるなんて思わないも  
ん。家電に心はあるんですかって話」

香「なんで毎日家に来んの」

麗「え？」

香「ん？」

麗「ああ、これ、調理実習で作りすぎちゃったから、おねえにあげようと思って」

香「そんな毎日調理実習ないでしょ」

麗「うちの学校変わってるからさ。なんて言うの？ 今の世の中、結婚する方が珍しいとかさ。人間ひとり生きていくための修業的な？ そんな感じで毎日調理実習があるわけ。そんでみんなで作りすぎちゃうってわけ。だから、おねえにおすそわけ」

香「もう要らないから。要らない。冷蔵庫だって、電子レンジだってもういないんだから。もらっても意味ないでしょ」

麗、ごみ箱を開ける。

ゴミ箱のなかに捨てられたタッパーに入った食べ物を見つけてしまう。

麗「そ」

香「迷惑なだけだからさあ」

麗「一口だけ」

麗、香の口元にスプーンですくったチ

ヤーハンを持って行く。

香「要らないって言ってるでしょ！」

香、麗の手を払いのける。

麗「あ」

香「もう来ないで」

麗、スプーンを拾い、床に散らばった

チャーハンをかき集める。

麗「だめだよ、そんなこと言っちゃ」

香「要らない、全部要らない！」

香、布団の中に潜る。

麗、椅子に座り、持ってきた食べ物を

食べ始める。

麗「おいしー！ こんなにおいしいのに、お

ねえは損してるなあ」

香「うるさい」

麗「ああ、おいし。明日は土曜日だから調理

実習ないし、おねえには、お裾分けできな

いや。ああ、可哀想」

香「出て行って！」

麗「ああ、そんなこと言ったらダメなのにな

あ。おねえ、本当にひとりになっちゃうよ」

香、走ってベッドから出てきて、麗に  
掴みかかり、玄関の方へ追いやる。

○同・玄関（昼）

香、玄関ドアに麗を押さえつける。

香「消えろ！」

麗「おねえ、くさっ」

香「は？」

○同・風呂場（昼）

湯船につかる香。

服を着たまま、香の頭を洗う麗。

麗「かゆいところはありますか？」

香、むすつとしている。

麗「黙ってらっしゃるといふことは、痛くも  
かゆくもないということですね」

香「うるさい」

麗「言ってくださいね。痛いとかかゆいとか」  
香「うるさい」

麗 「私、将来美容師になろうかな。シャンプーがうまい美容室を開いて、いろんな人のかゆいところをかいてあげんの」

香 「あっそ」

麗 「ねえ、おねえ、鏡見て」

香、鏡をちらっと見る。

鏡のなかには泡の力でツンツンの変な髪型にされた香の横に笑顔の麗がいる。

香、麗の笑顔に気が付き、麗に湯船のお湯をかける。

麗 「ちよっと、おねえ！」

香 「ばーか」

香、再度、麗にお湯をかける。

麗 「最悪！」

麗、シャワーを香の顔にかける。

香 「やめてよ！ 死ぬ！」

麗 「おねえなんて死んでしまえ！」

香 「やめっ」

麗 「いつまでもウジウジしやがって！」

香 「や、やめて」



麗「なんでこんなにおかしくなっちゃったの」

香、シャワーのお湯におぼれそうになる。

麗「ばか！」

麗、シャワーを投げ、出ていく。

香、顔の水をぬぐう。

香「はあ」

香、湯船から上がり、床に落ちたシャワーを拾う。

○同・香の部屋（夕方）

麗、部屋の隅でうずくまっている。

風呂上がりの香、部屋の入り口で

香「麗」

麗、さらに膝を抱える。

香「麗、ごめん」

麗、より深く顔を膝にうずめる。

香「私が悪かった。自分にいっぱいいっぱい  
で麗の気持ち、考えられなかった」

麗「ねえ、おねえ」

香「ん？」

麗「お父さん、やばいの知ってる？」

香「え？」

麗「もうすぐだって」

香「やばいのは元からでしょ」

麗「もうすぐで死んじゃうかもって」

香「（鼻で笑う）」

麗「もう会えなくなるかもって」

香「そんなの知らないよ」

麗「おねえは別にいいの？ お父さん死んで  
も」

香「別に」

麗「明日、お母さんとお見舞い行くけど、お  
ねえも」

香「一生会わないって決めてるから」

麗「おねえがそれでいいなら、それでいい」

香、蛇口を捻り、グラスに水を入れる。

飲む。

麗「おねえ、寒いんだけど」

香「ああ」

香、エアコンのリモコンを手にする。

麗「つかないよ」

香「そうだった」

麗「おねえまで壊れたら嫌だよ」

香、服を投げる。

香「それ着な」

麗「うん」

○病院・誠の病室の前（昼）

香、病室の前で立ち止まっている。

ノックをしようとするが、やめる。

病室のドアが開く。

高橋聡子（42）が現れる。

香「あ」

聡子「香ちゃん、来てくれたんだ。入って入って」

香「いえ」

香、聡子に会釈して、言われるがままに病室へ入っていく。

○同・誠の病室（昼）

麗、香に気が付き

麗「おねえ、来てくれたんだ」

香、顔を伏せながら、麗のほうへ歩み寄る。

麗「お父さん、おねえが来てくれたよ」

ベッドに腰かけている高橋誠（67）が香の方を見る。

香「お父さん」

誠、笑顔になり

誠「誰ですか」

香「あ」

麗「おねえだよ、おねえ。お父さんの娘、香」

誠「おかえりください」

麗「お父さん」

誠「麗、知らない人に誰を見とる？ 娘はお前だけ」

麗「違うよ、違う。おねえだって娘なのに」

香「麗、もういいよ。ありがとう」

香、足早に病室を後にする。

○同・誠の病室の前（昼）

香、病室ドアを閉める。

立ち止まって、息を整える。

聡子の声「香ちゃん、もういいの？」

香、声の方を見る。

聡子、メロンが載った皿を持っている。

香「帰ります」

香、廊下をずんずん進んでいく。

聡子「香ちゃん！メロン、食べて行って」

○同・病室（昼）

麗、ドアを開こうとした瞬間、ドアが開く。

ドアの向こうに聡子。

麗「おわ、びっくりした」

聡子「あら、麗。香ちゃん行っちゃった」

麗「うん」

聡子「メロン切ったの。食べる？」

麗「要らない。私、嫌いだから」

聡子「あれ。そうだった？」

麗、聡子とドアの間をすり抜け、香を  
追いかける。

○同・廊下（昼）

麗、角を曲がろうとしている香に追いつき、香の手を掴む。

香、麗の手を振り払うことなく、歩みを止める。

香「麗のお母さん、メロン切ってくれてたよ。  
食べに戻りなよ」

麗「私メロン嫌いだもん」

香「嘘つかないでいいよ。私は大丈夫だから」

麗「本当だよ。メロン好きなおねえじゃん。  
お父さん、それを覚えてて、お母さんにメ  
ロン用意させたんだから」

香「そんなわけない。私のことなんか忘れて  
た」

麗「お父さんは忘れてない。私のなかにおね  
えを見てるのはお父さんの方だよ！」

香、麗の手を払う。

麗 「戻ろう。お父さんのところに。おねえが  
大好きなメロン、食べなきゃ。お父さんは  
満足して死ねないんだから」

香 「早く死ねばいいのに」

香、麗から逃れるように去る。

前から医者たちが慌てて走ってやって  
くる。

香、病院を出ていく。

麗、取り残される。

○香の家・香の部屋（夕方）

香、帰ってくる。

香 「おなかすいた」

香、机の上に置かれたタッパーを見る。

タッパーのふたを開け、食べ始める。

スマホが震える。

香、ポケットからスマホを取り出す。

着信。麗からの電話。

香 「もしもし？」

○葬儀場（夜）

雨にもかかわらず、弔問客が多く訪れている。

祭壇には、誠の遺影がある。

聡子と麗、弔問客に挨拶をしている。

聡子「香ちゃん、来ないのかしら」

麗「私、見てくる」

麗、葬儀場の外へ行く。

○同・外（夜）

麗、傘を差し、弔問客の間をすり抜ける。

葬儀場の門付近に香。

麗、雨に打たれず濡れになった香を

見つけ、駆け寄る。

麗「おねえ」

麗、傘の中に香を入れる。

香「人が多いね」

麗「お父さん、この地域では有名だから」

香「うん」



麗 「入らないの」

香 「入れないの」

麗 「何言ってるの？ お父さんの娘なんだからさ」

香 「私、もう娘じゃないもん」

麗 「娘でしょ」

香 「あそこにいるのは、もうお父さんじゃないもん」

麗 「何言ってるの」

香 「ゴミだよ」

麗 「おねえ」

香 「捨てなきゃ」

香、葬儀場の中へずんずん歩いていく。

麗、急いで香を追う。

麗 「おねえ、待って！ 本当に捨てないよね。」

「ゴミじゃないもんね？」

香と麗、葬儀場の中に入っていく。

しばらくして、棺桶を運んでくる香と麗、葬儀場から走って出てくる。

聡子「待って、待ちなさい！」

そのあとを聡子や弔問客や警備員が追いかける。

麗「おねえ、みんな追いかけてくる！」

香「当たり前でしょ！ちゃんと持って」

麗、持ち手を持ち直す。

麗「やばいやばい。おねえ！ 捕まっちゃう

よ」

麗と香、無我夢中で走っていく。

麗「ひえええ」

○丘（夜）

香と麗、小高い丘のベンチで座っている。二人の間には棺桶。

香「高橋誠さん、見えますか？ この景色。

はは、見えないか」

麗「おねえちゃん、さすがにもう帰らないと」

香「星、綺麗だね」

麗「うん・・・」

香「お父さんはこの景色を私たちに見せたか

つたのかな」

麗「え？」

香「ねえ、麗。高校どうなの？ 楽しい？」

麗「なに急に？ そんなこと聞いてくれたことないじゃん」

香「好きな人とかいるの？」

麗「いないよ」

香「うそでしょ」

麗「ほんとだよ」

香「ふうん」

麗「学校なんて、クソだよ」

香「今が一番楽しい時期でしょ」

麗「本当にそう思う？」

香「毎日調理実習あるんですよ。楽しいじゃん」

麗「うん」

香「うそじゃん」

麗「うん、うそ」

香と麗、ぼんやりと空を眺めている。

麗「私、本当は学校行ってない」

香「うん」

麗「私、お父さんもお母さんも大っ嫌い」

香「うん」

麗「おねえは好きだよ」

香「はは」

麗「おねえは、私を見てくれるから好き」

香「お母さんは、なんで嫌いななの？ あんなにやさしくて、美人なのに」

麗「やさしくて美人だからだよ。だから嫌い」

香「もつとほかに理由があるんでしょ」

麗「なに」

香「私かわからないと思う？ 私とあんた、血が半分つながってるんだよ。お父さんの悪いところも良いところも。良いところなんて思い浮かばないけど」

麗「ふふふ」

香「でも、ひとつ良かったことはある。お金があつた」

麗「あはは、そうだね」

香「お父さん、後悔してるかな」

麗 「なにを」

香 「人生を」

麗 「なに、おねえ、お父さんに後悔してほしいの」

香 「わかんない」

麗 「もう死んだから、後悔も謝ることもできないよ。かわいそう」

香 「そうだね」

麗 「お父さんのこと、どうするつもり？」

香 「どうしよっか」

麗 「何も考えてなかったの」

香 「うん」

麗 「なのにこんなことして、おねえやばいよ」

香 「ただ娘に、いや、他人に、自分の最期をぶち壊されて、今までの人生を後悔すれば

いいのにつて」

麗 「もう死んだよ」

香 「死んでも後悔してほしいの」

流れ星が流れる。

香 「あ、流れ星！ 流れ星って、思ったより

早いよね。お願い三回言おうって思った時にはもう遅い」

麗「ねえ、おねえ」

香「ん？」

麗「気は済んだ？」

香「こんなんじや済むわけない。なんでお父さん、死んじやったんだろ」

麗「生きてる間にチャンスは何回もあったじやん」

香「チャンスなんてなかった。死んだら、私の気持ちも晴れると思ってた。なのに、こんな気持ちになるなんて」

麗「おねえ、お父さんのこと好きだったんでしょ」

香「好きじゃない」

麗「ううん、好きだった」

香「嫌い」

麗「あつそ」

香「嫌い、嫌い、嫌い、大っ嫌い！」

麗「そう言えばよかったのに」

後ろから光を当てられる。

香と麗、振り向くと警察官と聡子の姿。

警察官「その二人！ 止まりなさい！」

香「止まってるじゃん」

麗「お母さん！」

聡子「香ちゃん、麗、自分たちが何をしたか

わかってるの？」

麗「ごめんなさい」

香「私、まだ何もしてません」

麗「おねえ、もうやっちゃってるんだよ」

○葬儀場・親族控室（夜）

座っている香。

麗、お弁当を渡す。

麗「おねえの分」

香、お弁当を受け取る。

麗、香の横に座り、お弁当を食べ始める。  
る。

香もお弁当を食べ始める。

麗「家電じゃなくて、お父さんにお線香あげ

た気分はどう？」

香「何にも感じない」

麗「そっか」

香「なんも感じないんだよね。おかしいのかな」

麗「さつき、なんで死んじゃったんだろうって  
言ってたじゃん」

香「そういう麗はどうなの」

麗「私もかな。お父さんが元気な時、お父さん、仕事ばかりで全然話せなかったし」

香「うん」

麗「お父さんが何をしてるのかも、どんな人なのかもわかんないなんておかしいよね。  
娘なのに」

麗、泣いている。

香、麗の頭を優しくなでる。

香「麗が泣くなんて珍しい」

麗「泣いてない」

香「強がんなって」

麗「強がってない」



香「あんたさ、まだ17歳でしょ。なんでそんな我慢強くなっちゃったの」

麗「わかんない」

香「お母さんが死んでから、お父さんまさかの再婚だからね。あんたのお母さん、私と10歳しか変わらないじゃん。まあ、それはちよつと嫌だったな」

麗「ごめん」

香「なんで麗が謝んの」

麗「私は、おねえの気持ちを理解できないから」

香「理解しなくていいよ」

麗「私がおねえからお父さん奪ったと思ってた」

香「奪う？」

麗「おねえが孤独なのは、私のせいだと思ってた」

香「だから、毎日ご飯作ってもってきてくれてたの」

麗、頷く。

香「麗、あんた。全部間違ってるよ」

麗「え」

香「孤独っていうか、今の人生を選択したのは

私だから。あんたのせいなんかじゃない」

麗「おねえ、ありがとう。嘘でもうれしいよ」

香「あんたさあ、なんでそんな」

聡子の声「香ちゃん」

麗と香、聡子の声のほうを向く。

聡子「香ちゃんの番だよ」

香「はい」

香、聡子と寝ずの番を交代しに、控室から出ていく。

聡子、入ってきて

聡子「麗、香ちゃんとなに話してたの」

麗、聡子を見無視して、お弁当を食べる。

### ○同・安置室（夜）

焼香台に煙が立っている線香が一本。

香によって線香がもう一本立てられようとしている。

麗の声「おねえ！ なにしてんの」

香、やべえという表情で、後ろ手に線香を隠す。

麗、香に近づいてくる。

麗「ちゃんと寝ずの番やってる？」

後ろ手に持った線香が香の手に当たる。

香「あつつ！」

麗「おねえ、どうしたの」

麗、香の腕をつかむ。

麗「なんで線香が」

香「極楽浄土までの道を迷わせようと思って」

麗「おねえ、もう嫌がらせやめなよ」

香「もつとなんかいい方法ないかな。お父さ

んが天国に行けなくなる方法とかさ」

麗「おねえが天国に行けなくなったらどうす

んのよ」

香「それはそれで、別にいい」

麗「そ」

香「もう交代？」

麗「うん。交代」

香「じゃ」

香、部屋を出ていく。

麗、香が出ていくのを確認し、線香に

火をつけ、焼香台に線香を二本立てる。

麗「迷いますように」

○同・親族控室（夜）

聡子、横たわっている。

香、静かに入ってくる。

聡子、香の方に目を向ける。

香「起こしちやいましたか」

聡子「香ちゃん」

香、聡子の横に座る。

聡子、横たわったまま

聡子「眠れないのよ」

香「目を閉じるとあの人の顔が！ 的な感じ

ですか」

聡子「そうなのよ」

香「へー、ラブラブですね」

聡子「そんなことない」

香「さつきはすみませんでした」

聡子「え？」

香「さつきは、お父さんを連れ去ってしまった  
てすみませんでした」

聡子「いいの」

香「え」

聡子「あの人、香ちゃんに悪いことしてたで  
しょ」

香「悪いことって。あんまり覚えてないです  
けど」

聡子「あの人、悔やんだ。香ちゃんを殴っ  
たこと、置いてけぼりにしたこと」

香「そんなことありましたかね」

聡子「でも、あの人に対して怖いっていう感  
情が残ってるでしょ」

香「・・・」

聡子「実は、麗にも手を上げようとしたこと  
があるの」

香「麗に？」

聡子「ええ」

香「あんなにいい子なのに」

聡子「いい子でもなんでも関係ないの。お酒  
って怖いわね」

香「そんな」

聡子「お酒のせいにしてもいけないんだけど。  
絶対悪だから」

聡子、腕まくりをする。

痣が腕に広がっている。

香「聡子さん」

聡子「あの子に暴力を振るうなんて許せない  
でしょ。だから、私はあの子に隠れて、あ  
の人を受け止めていたの。痣が消えてなく  
ならない。目を瞑ってもあの人が消えない  
の」

香、何も言えない。

聡子「香ちゃん、あの人生まれ変わったたら  
どうする」

香「生まれ変わったら、ですか？」

聡子「生まれ変わっても、また親子になりた  
い？」

香「うーん、どうでしょう」

聡子「私は、あの人が正常に生きていくのを

見届けたい」

香「なんでそんなに優しいんですか」

聡子「優しい？」

香「そんな奴のために、なんでそんなこと考

えられるんですか？ 私には意味が分かり

ません」

聡子「一度、誓い合ったんだもん。簡単に切

れる縁じゃない」

香「そうやって考えてる聡子さん、気持ち悪

いですね」

聡子「そうでしょ？ 気持ち悪いわよね」

香「すみません」

○火葬場（昼）

骨になった誠。

麗「骨、ボロボロだね」

香「うん」

骨壺に遺骨を入れていく。

麗 「棺桶も小さかったけど、また小さな入  
れものに入れられるんだね」

香 「うん」

麗 「なんかあっけないね」

香 「うん」

麗 「天国いけるのかな」

香 「うん」

麗 「さすがにいけないよね」

香 「うん」

麗 「私も呪っておいた」

香 「え」

麗 「極楽浄土までの道、迷ってるかな」

香 「あんたもやったのね」

麗 「うん」

麗、骨上げをしながら

麗 「おねえはさ」

香 「うん」

麗 「今、幸せ？」

香 「え？」

麗 「お父さんが死んで幸せ？」



香、麗が掴んだ骨を箸で掴むが、骨を落としてしまう。

香「ごめん。やっぱり無理」

香、走って火葬場を出ていく。

麗「おねえ！」

○丘（夕方）

町内放送で夕焼け小焼けが流れる。

丘を登ってきた香、足を止める。

涙を流す。

風が香を丘の端へ押しやる。

麗、息を切らして、やってくる。

麗「おねえ、足早すぎ」

香、涙をぬぐい、麗のほうを振り返る。

香「なんでついてきたの」

麗「おねえが心配なの」

香、丘を下りていこうとする。

麗「うわあ、泣きそう。あのときもこの音鳴っててさ。死ぬかもって思ったよね。ちょっと暗くなってきたのに、下の方から夕

焼け小焼けが聞こえてくるんだよ？ 泣く

よねー」

香「泣けないよ」

麗「泣けるんだよ、これが」

香「泣けないよ」

麗「なに、泣いてんの？」

香「泣いてないよ」

麗「おねえが泣いていようが泣いていまいが私にはどうでもいいんだけどね」

香、静かに涙を流す。

麗「おねえは私のことどうでもいいかもしれないけど、私、お父さんのこと嫌いになつたんだよ？ あの日」

香「え」

麗「だって、おねえが泣いてたんだもん」

○《回想》丘（夕方）

誠（５５）、丘を登っていく。

誠「お前ら、遅いぞ」

香（２０）と麗（５）、手をつないで

懸命に誠を追いかける。

香「待って、お父さん」

麗「もう、麗帰りたい」

誠「もうすぐだから、早くついてこい」

香「麗は子供なんだよ」

誠「じゃあ、お前がどうにかすればいいだろ」

香「なんで」

誠「黙ってついてこい。そうじゃなきゃ、置いて帰るぞ」

麗「怖い。嫌だー」

誠「泣くな！ うっとうしい」

誠の姿、遠くなっていく。

香「帰ろうか」

麗「お父さん」

香「もう暗くなってきちゃったよ？」

麗「怖いよー」

夕焼け小焼けの音楽が下の方から流れてくる。

香「麗、おねえ、もう帰りたい」

香、涙する。

二人、丘の頂上に着くが、誠の姿はない。

あたりが暗くなるなかで、二人ベンチに座っている。

二人の後ろから聡子（30）の声が聞こえる。

聡子の声「香ちゃん、麗！」

麗と香、振り向き

麗「おかあさん！」

麗、泣きながら聡子に抱き着く。

香、泣きそうだが堪える。

○ ≪回想あけて≫ 丘（夕方）

香「なにそれ、覚えてない」

麗「嘘つき」

香「本当だって」

麗「帰ろうか」

香「ううん」

麗「もう暗くなってきたよ？」

香「まだ帰らない」

麗 「なんでだよー」

香 「今日はお父さんを捨てよう。ここで」

麗 「え、どういうこと？」

香 「私たちを捨てたこの丘で、お父さんを捨てよう」

麗 「一旦、メロンでも食べる？」

香 「なんでメロン？」

麗、持ってきた袋からメロンを出しながら

麗 「なんか落ち着いた方がいいんじゃないかなって」

香 「私はいつでも落ち着いてるって」

麗 「それでも。ねえ。それに私、おなかすいたし。腹ペコの妹を困らせないで」

香 「わかった」

麗、香にメロン一玉を渡す。

麗 「はい」

香 「どうやって食べろと」

麗 「丸かじり？」

香 「やだよ」

麗 「はは、だよね」

香 「そうだよ」

麗 「なんか葬儀の時に参列者みんなメロン持ってきてさ」

香 「なんでメロン？」

麗 「私もそう思って聞いたの。『どうしてメロンなんですか？』って。そしたら、お父さんが『俺の葬儀にはメロンを持ってこい』って言ってたってみんな口をそろえて言うの。お父さんもメロン、好きだったのかな」

香 「ふうん」

麗 「私の好きなものは覚えてないのに、おねえの好きなものは覚えてるの、不思議だったんだよ。でも結局、自分が食べたかっただけなのかもね」

香 「かもね」

麗 「包丁なくても食べられるかな、メロン」

香 「無理じゃない？」

麗 「そこは現代人なんだから、検索の一つや二つしてみなさいよ」

香「無理だった」

麗「検索した？」

香「今、した。やっぱり無理だった。メロン、包丁なし、で調べたら、一人暮らしで包丁がない方が珍しいですよとか、軽くディスプレイされてる人いた。可哀想」

麗「おねえに可哀想なんて概念あるんだ」

香「失礼じゃん」

麗「ごめんごめん。メロンは諦めるか」

香「諦めよ」

麗「うん」

麗のお腹が鳴る。

麗「あ、ごめん」

香「ごめん、何も持ってない」

麗「空気食べとく」

麗、空気を食べる。

香「あははは、やめてよ」

麗「おねえも食べてみ」

香「いやだよ」

香、空気を食べ始める。

麗 「なんだ。おねえもお腹すいてるじゃん」

香 「やれって言われたからやっただけ」

麗 「あはは、変なの」

香 「変だね」

麗 「ねえ、おねえ。どうやって捨てるの？

お父さん」

香 「お父さんとの思い出を語るの」

麗 「良い思い出なんてないよ」

香 「悪い思い出でもなんでも全部しゃべるの。

話して捨てていくの」

麗 「捨ててもさ。ずっと心のなかにいるかも

よ」

香 「それでもいい」

麗 「荒療治」

香 「お父さんが死んでも、私の心はすっきり

しないままなんだよ。付き合って」

麗 「わかった」

香 「じゃあ、話すよ」

麗 「うん」

香 「（深呼吸）」



麗 「なんでそんな息吸うの？」

香 「いつ息吸えなくなってもいいように」

麗 「なに？ 死ぬほど嫌なの？ やめればいいのに」

香 「嫌でもやらなきゃいけないの」

麗 「ふうん。わかった。早く、話して」

香 「うん」

香、咳払い。

香 「私がメロンを好きになった理由、麗は知ってる」

麗 「知らない」

香 「小さい時、誕生日にお父さんが、豪華なケーキを買ってきてくれたの」

麗 「うん」

香 「そのケーキの上にたくさんメロンが載ってて、そんなケーキ初めて見たから嬉しくてさ。それからメロンを好きになったんだけど。まあ、正確には、お父さんのことを好きになったんだと思う」

麗 「げえ」

香「誕生日プレゼントなんてくれない人だったし、子供ながらに嬉しかったのよ。子供ながらにね？ メロンももちろんおいしかったけど、心がおいしかったっていうか、嬉しかったの。それからメロンを好きになった。でも、それ以降、お父さんが何かくれたことはなかったな。くれたのは苦しさ  
と悲しみだけ」

麗「言えてる」

香「でしょ」

麗「私がメロンを嫌いな理由、知ってる？」

香「知らない。ただの食わず嫌いじゃないの」

麗「違う」

香「違うんだ」

麗「うん。私、おねえがうらやましかったんだと思う」

香「え？」

麗「私、お父さんになにかもらったことなんてないもん。ましてや誕生日ケーキなんて」  
香「そんなことないよ。ぬいぐるみとかたか

さん買ってもらってたじゃん。私は買って  
もらったことないのに」

麗「そうだっけ？ それおねえにじゃない？」

香「違う違う。麗だって」

麗「そう？ とにかく、私はおねえがうらや  
ましくて、メロンを嫌いになったの」

香「へえ、おいしいのに？」

麗「そうだよ。初めて食べたとき、頬っぺた  
が落ちるかと思ったもん。でも、嫌いにも  
なった」

香「そっか」

麗「そうだよ。だから、似た名前のスイカが  
私の好物なの」

香「似てるか？」

麗「ウォーターメロンだよ？ もう一緒でし  
よ」

香「一緒じゃないよ。味も違う。名前も違う  
もん」

麗「なんでお父さんは私の好きな食べ物のご  
と、覚えてくれなかったんだろう」

香「さつき、麗が言ってたとおり、お父さんがメロンを好きだったんじゃないの？別に私の好きな食べ物を覚えてたとかじゃなくって」

麗「うん」

香「お父さん言ってたもん。『お前は俺に似てるからムカつく』って」

麗「うわ、お父さん史上、一番人としてありえない発言じゃん」

香「最悪だよ」

麗「最悪だね」

香「私がこんなになったのって、全部お父さんのせいだと思う」

麗「それはあるね」

香「あるよね。そんなの言われて、曲がらずにいられるかって話だよ」

麗「その割には曲がらずに生きてきたけどね」

香「だから今、こうなってるわけよ」

麗「どうなってるのよ」

香「ほら、麗が言ってたように、『おかしく』

なってるわけよ」

麗「ごめん、あのときは」

香「わかってるよ。自分でもわかってるから」

麗「おねえはおかしくなんかないよ。人より

傷つきやすくて、優しくてちよつと根に持

ちやすいだけだよ」

香「悪口じゃん」

麗「褒めてもいるよ」

麗「そういえば、お父さん、私にもなんか言

つてたよね」

香「そうだったけ？」

麗「ほら、やっぱりね。自分に言われたこと

しか覚えてないもんね。仕方ないね、人間

だもの」

香「みつを？」

麗「あはは、そうそう。おねえ、覚えてない

んだったら、教えてあげる。なんて言われ

たか。『お前はつまらんから出ていけ』だ

よ？ なにがつまらんだよ。お前だよ、つ

まらんのはって感じ」

香「なにそれ、ひどいね」

麗「いやあ、この日は泣いたね。意味がわからないし、私はつまらなくないもん」

香「ありえないわ。今、骨壺あったら割ろうかと思っただもん」

麗「ははは、やめてやめて」

香「やめるやめる」

麗「ははは」

香「覚えてなくてごめん」

麗「別にいいよ。いっぱいいっぱいだったんでしょ。おねえのほうが、早く生まれて、お父さんと接する期間が長かったんだからさ」

香「あんた本当に17歳？ 私より大人じゃん」

麗「私、おねえのこと年上だと思ったことないよ。というかおねえって呼んでるけど、あだ名みたいなもんね。お姉ちゃんって感じじゃないし」

香「お姉ちゃんっ」

麗 「気持ち悪いな」

香 「私、お父さんにしてもらった嬉しかったことしか覚えてないのかもしれない」

麗 「辛すぎて脳の忘却機能が作動したんじゃない？ 正常正常。人間の防衛本能に感謝して」

香 「私、麗のことずっと、何も知らないくせにと思っていた」

麗 「だろうなって思ってた。私はさ、お父さんといいた期間が短かったから、おねえよりマシだと思ってたけど。言葉に出すと結構ひどいね」

香 「麗、ごめん」

麗 「ごめんじゃすまないよ。お父さんみたいに死んでもらわないと」

香 「ごめん」

麗 「うそうそ、冗談。こんな冗談言うんじゃない。本当にごめん」

香 「すぐ謝るじゃん」

麗 「おねえには死んでほしくない。死ぬのは

あいつだけでいい。まあ、死んでも、死んでないって言うか、ね」

香「うん」

風が吹く。

香「お父さんの好きなもの全く知らないで終わっちゃったな」

麗「好きなもの知ってどうするの」

香「知ってたら、愛されてたかもって」

麗「まだ愛されたいの？」

香「ずっと愛されたかったのかも知れないな  
と思う。でも、ずっとそれを認めたくなく  
くて」

麗「引きこもった？」

香「かもしれない」

麗「そうかもね」

香「結局、私たち、捨てられなかったんだろ  
うね」

麗「最後の最後まで、会いに行っちゃった  
し」

香「麗はね」



麗 「おねえは、お父さんを捨てようとして

たのかもね」

香 「え？」

麗 「その代わりに壊れた家電は捨てられなくなつてたけど」

香 「なんのこと？」

麗 「お父さんが入院する前は、ガラクタのお葬式をする人間じゃなかったのに。バンバン物捨ててたのに。そういう人間になつてからは、部屋に足の踏み場もないんだから」

香 「確かに」

麗 「お、ガラクタって言っても怒らなくなつてる」

香 「私、怒ってた？」

麗 「本気で言ってる？」

香 「うん」

麗 「じゃあ、あのゴミたち、ちゃんと捨てなよ？」

香 「それは、ちよつと」

麗 「なんでよ」

香「なんか、ちょっと」

麗「もうちょっとだと思ったのに」

○香の家・香の部屋（昼）

お坊さんが経を唱えている。

仏壇には、冷蔵庫など家電たちの写真。

それに紛れて、誠の写真がある。

喪服姿の香と麗、手を合わせている。

○同・玄関（昼）

お坊さんを見送る香と麗。

香「ありがとうございました」

ドアが閉まる。

○同・香の部屋（昼）

香と麗、部屋に入ってきて

麗「まさか、四十九日がバッテリーングすると

はね」

香「あはは、偶然同じ日に死んだだけでも  
ね」

麗 「おねえ、新しい冷蔵庫買いなよ」

香 「うん」

麗 「捨てられるかは知らないけどさ、新しい冷蔵庫を買ったら、その冷蔵庫は捨てるんだよ。当分は無理でもさ、いつかは捨てなきゃダメなんだから。おばあちゃんになっても、その冷蔵庫と暮らしてます！ なんて、嫌でしょ。というか、新しい冷蔵庫買ったら、ほかのお亡くなりになった家電たちも捨てなよ。家電たちも成仏したいって」

おりんの音がチーンと鳴る。

香 「どうもこれまでお世話になりました」

麗、香のほうを見るとおりんを鳴らして、家電に向かってお辞儀をしてる香がいる。

麗 「おねえ何してるの？」

香 「どうもこれまでお世話になりました」

麗 「ちよっと待って。いきなり。ごめん。私が言いすぎたんだよね」

香 「どうもこれまでお世話になりました」

麗、頭を抱え

麗「はあ、とうとうここまで来たか」

香「どうもこれまでお世話になりました」

インターホンが鳴る。

麗「誰か、おねえを助けてあげてー」

インターホンが鳴る。

香、インターホンの画面を見る。

画面には聡子の姿がある。

○同・玄関（昼）

ドアを開けると、骨壺を持った聡子がいる。

香「聡子さん」

聡子「いきなりごめんなさい」

麗「お母さん」

○同・香の部屋（昼）

座っている香と麗、聡子。

聡子「私、やっぱり誠さんの姿が頭を離れなくて」

香「麗、あっち行ってなさい」

麗「なんで」

聡子「いいの。麗、驚くかもしれないけど」

麗「なに」

聡子「ごめんね。麗。私、ダメな母親よね」

麗「何言ってるの。そんなことない」

聡子「麗がメロンを嫌いってことも、忘れてた。麗にとって何が必要なのかも忘れてた」

麗「そんなこと言わないでよ。私、全部知ってる。お母さんが私を守ってくれてたことも全部知ってる。だから、メロンのことくらい気にしないで」

聡子、香に骨壺を渡して

聡子「お願いがあるんです」

香「お願い？」

聡子「誠さんをどこかに連れて行って」

香「お父さんを？」

聡子「お願いします」

麗「どこに連れていくの。お墓に納めなくて大丈夫なの？」

聡子「お墓に入るような人じゃないでしょ」

香、いきなり骨壺のふたを開け、床に骨をぶちまける。

麗「なんで骨、床にぶちまけたの」

香「私がお父さんにしてあげられる最後の親孝行をするの。あんたも親孝行しなさい。

聡子さんに」

麗「骨を床にぶちまけることが親孝行なの？意味わかんない」

香「私、やっぱりお父さんのこと許さないし、許せない。だから、お父さんに最期のチャンスをおあげるの」

香、骨を割る。

麗「待って、待って！なんで骨を砕いてるの？いくら恨んでもそれはちよつと」

香「麗もやりなよ」

麗「え？」

香「麗もやらないと」

麗「う、うん」

香「あなたがしてきたこと、私は忘れない！」

香、骨を砕く。

麗「あなたがしてきたこと、私は忘れない！」

麗、骨を砕く。

香「なんで私を置いていったんだよ」

香、骨を砕く。

麗「私の好きなものくらい覚えとけよ」

麗、骨を砕く。

香「なんで愛してくれなかったの」

香、骨を砕く。

麗「くそオヤジ！」

麗、骨を砕く。

香「ああああああああ、バカ野郎うううおお

おおおおおおお」

香、骨を連打で砕く。

麗「くそおおおおおおお」

麗、骨を連打で砕く。

香「聡子さんも」

聡子、骨を手に取り、力任せに砕く。

三人、笑い出す。

香「あはは、粉々」

麗 「はは、どうしよう」

聡子 「ふふふ、これでいいんだもんね、これで」

麗 「私たちも地獄行きだね」

香 「お父さんは地獄にも行けないよ」

麗 「そうだね」

香 「うん」

麗 「そうだよね」

○電車（夕方）

電車に揺られる香と麗、聡子。

香 M 「私の長年にわたる父への結論は、父を還すこと。許さないし、許せないし、もう意味もないと思うけど、父にチャンスを与える。これが最期のチャンス。天国にも地獄にも行けないと思うから、せめて・・・」

電車のドアが開き、三人降りていく。

町内放送で夕焼け小焼けが流れ始める。

三人、ホームに降り立つ。



○丘（夕方）

風が吹き、草木が揺れる。

遠くで夕焼け小焼けが鳴っている。

香、はしやぎながら、丘の頂上に到着。

その後ろから麗と聡子が歩いてくる。

香「頂上！」

麗「はあ、はあ、よくそんなはしやげるね。

ずっと引きこもりだったのに」

香「あんたこそ、なにせえぜえ言ってるの」

麗、息を目一杯吸う。

三人に風が強く吹く。

香「やつとだね」

麗「うん」

香、息を目一杯吸う。

香「これからは、お父さんが風に乗っちゃう

から。今の空気をたくさん肺に含んどきな

よ」

麗「うん」

三人、息を目一杯吸う。

香「今だ！」

麗「今？」

香「いけー！」

麗「えい！」

麗と香、風呂敷を広げる。

風に乗って、粉々に砕かれた骨が舞う。

草木が風に吹かれ、激しく揺れる。

聡子、目を瞑り、風を浴びている。

麗と香は、晴れた表情で風を感じている。

香M「父が死ぬのを想像したことは何百回とあつた。でも、父の最期をこんな形で迎えるなんて想像もしなかった。お父さん、あなたを一生許せないけど、最期にチャンスをあげる。せめて次は・・・」

タイトル「父を還す」

香M「今日、私は父を還した」

【終】